

実体に即した漢字はやさしい

幼児は、実体に即して考えます。実体のない言葉は理解できません。ところで、多くの方は、よく、鳩を見ても雀を見ても、これを「鳥」と教えます。しかし、鳩は鳩、雀は雀と教えるべきです。鳩や雀がわかってから、それを統合する言葉として「鳥」を教えるのです。

「お母さん」という言葉にしても、初めは自分の母親だけを表わす言葉としてしか、理解できないものです、そういう認識の段階にある時には、「友子さんのお母さん」という言葉が、理解できなくて、「それはお母さんじゃあない。お母さんはここ。」と言って、自分の母親を指します。

幼児は、このように、実体に即して言葉を理解しますから、実体のない、抽象的な言葉を早く与えるべきではありません。

鳩も「鳥」、雀も「鳥」、鶴も「鳥」と教えたのでは、幼児には理解できません。まず、実体に即して、「鳩」「雀」「鶴」を教え、それらに共通している点、「翼がある」、「羽毛が生えている」、「足が二本」、そういう認識を通して初めて、「鳥」という言葉を教えるのです。

そうすれば、「カナリヤ」を見ても、その名前はわからないが、「鳥」の仲間である、という理解ができるようになります。

漢字も、実体に即した漢字は、三歳児なら十分に理解できます、二歳児でも三十パーセントは理解します。一般には、三歳くらいから始めるのが適当です。

漢字も、言葉と同じように、実体に即して教えるのですが、漢字の場合は、「漢字、言葉、実体」と、この三者を結びつけていっしょに教えます。

つまり、「鳩」という字が「はと」と発音できただけでは不十分で、鳩そのものが頭に描き出されなければなりません。言葉が、実在を思い起こさせる「聴覚的信号」であるのに対して、漢字は、実在を思い起こさせる「視覚的信号」です。

実体に即した漢字は、どんなにむずかしそうに見えるものでも、幼児にとってはむずかしくありません。それはおとなの考え方で、誤った先入観です。漢字を幼児に与える場合には、この先入観をぜひ捨て去る必要があります

牛乳瓶には「牛乳」の字がありますので、これなどは、正に実体に即してすぐ覚えられる漢字です。牛乳の実体と「ぎゅうにゅう」という言葉

はすでに結びついているでしょう。それに「牛乳」という漢字を結びつけるのです。

この場合、「牛乳の牛は『うし』とも読めて、乳は『ちち』とも読めるのよ。」とすぐ教えたがるのですが、これはいけません。その教え方では、実体に即していませんね。「牛」という漢字は、実在なる牛に即して別の機会に教えなければなりません。

実体に即して「牛」を教えた場合でも、「この字は、前に教えてあげた『牛乳』の『牛』ですよ。」などと言ってしまってはいけません。それは、「これは栄養がある食べ物だからね。」と言って、子供の口へ食べ物を押し込むようなものです。

子供の気が付くまで待って、「お母さん、牛という字は、牛乳の牛と同じ字じゃあないの。」と言った時に、「えらいわねえ、気が付いて、牛乳って、牛の乳なのよ。だから、牛の乳と書いて『ぎゆうにゆう』って読むのよ。」と教えてやります。